

# SPECIAL FEATURE

特集

ともしび

## 無医地区に灯をともして

### 移動診療車が行く!～日赤へき地医療拠点病院の活動～

学校がなくなる、商店がなくなる、そして医者もいなくなる……。それでも、受け継いできたその土地で生きていく人々がいます。今回は、へき地で暮らす人々に寄り添う、広島県・庄原赤十字病院の取り組みをご紹介します。



左) 田んぼの真ん中に建つ集会所で診察。「患者さんには地元の方言で親しみやすく話しかけることを意識しています」と竹村医師  
右) 収穫前の青い稲穂が広がる集落に、山道を越え移動診療車がやってくる



#### へき地医療とは?

へき地とは、山間部や離島など、交通条件および経済的、社会的条件に恵まれない地域を指します。そういった地域では、医療の確保が難しく、無医地区も少なくありません。日赤では全国に91ある赤十字病院の中で、17施設が国から「へき地医療拠点病院」として指定されています。

### 「この地域は、自分たちで守る」庄原赤十字病院の巡回診療

#### 広島県の無医地区数:計53カ所



広島県令和4年度無医地区調査結果より

#### 無医地区を有する市町:9市町

広島県は、全国の中でも無医地区が多く、特に、中国地方のほぼ中央に位置する庄原市は、過疎化・高齢化が進むとともに、無医地区が増加し、社会的環境は厳しさを増す一方です。庄原赤十字病院では、約40年前から巡回診療を開始し、10年前からは移動診療車を導入して、週に2日、1日あたり2カ所のペースで、6つの地域の巡回診療を行っています。なお、この移動診療車は、庄原市に隣接する2市・1町でも活用され、庄原赤十字病院を含めて5つの病院が連携し、連日運行しています。



庄原赤十字病院  
総合診療科医師  
たけむら ゆり  
竹村 優季さん



庄原赤十字病院  
医療社会事業課長  
ふじさわ ゆかり  
藤原 由佳里さん

#### 住み慣れた場所で、この先もずっと生活できるための手助けを

庄原赤十字病院に勤務して1年目。出身は広島市で、研修医時代にこの病院で巡回診療の実習を経験したことが、今につながっています。巡回診療では、大きい検査をすることはできませんし、持ち運び薬にも限りがあります。月に1度のペースで診ていく中で、気になることがあったら病院で検査してもらおうのですが、山間部で暮らす方々は病院に来るのも1日かかりで、大きな負担になるので、来院検査の見極めを慎重にしています。巡回診療の担当になったばかりのころはあまり話してくださらなかった方が、家のことや仕事のことなども積極的に話してくれるようになってうれしいですね。皆さん高齢ですから畑仕事も無理をしてほしくないですが、育てている果樹や畑への思いを感じると、その人の人生に触れているような気持ちにもなります。健康はもちろん、その人が大切にしている、住み慣れた環境での生活を維持していくために、巡回診療が少しでも役に立つことを願っています。

#### 「自分たちは忘れられていない」移動診療車が住民の心のよりどころに

私は庄原市で生まれ育ち、私自身も雪が積もると身動きが取れなくなる地域から病院に通勤しています。巡回診療を行っている帝釈地区は過疎化が進んで、今ではバスも予約しないと運行しないような不便な生活環境ですが、それでも、住人にはそこで暮らしたい理由があります。私たちが巡回診療を続けることで、「自分たちを気にかけてくれる人がいる。忘れられていない」という希望の光になればいいなと思っています。

AM 9:00

#### 庄原赤十字病院を出発

出発の30分前から移動診療車に医療器具や薬を積み込む。医師、看護師、臨床検査技師、事務職員が1チームとなり出発。今回は2人の研修医も同行する。



#### 庄原市帝釈地区 移動診療車による巡回診療に密着!

広島県内の53の無医地区のうち、23の地区が集中する庄原市。庄原赤十字病院にある移動診療車は、地域内の複数の病院が巡回診療で利用しているため、フル稼働。竹村医師の巡回診療の一日を追い、患者さんたちの声に耳を傾けました。

AM 9:45

#### 庄原市帝釈診療所に到着

- 1 採血後の診察の様子。「病院での診療のようにシステムが整っているわけではないので、患者さんの状態が分かる聴診は特に大切にしています」(竹村医師)。研修医も見つめる。
- 2 採血は看護師が担当。人員の確保が課題のへき地診療では、庄原赤十字病院を退職したOG看護師が再雇用で活躍する。
- 3 採血された血液は、移動診療車内ですぐに検査にかけられる。臨床検査技師も病院OB。



#### 患者さんの声



おとよしのり  
表 良則さん・70代

今日は、いつもの血糖や血圧のチェックだけでなく、人間ドックで見つかった腎臓の精密検査の結果を聞きに来ました。不安でしたが結果良性だったのでホッとしました。この地域は高齢化率61%、80歳以上が4分の1にもなり、私を含め足が悪い人も多いので移動は大変です。皆、この巡回診療には大変感謝しています。



たなべ てるとし  
田邊 輝満さん・70代

妻が50代で大病をしたこともあり、夫婦共々できるだけ長く健康でいるために、気になることはすぐに相談したいと思っています。今日は内視鏡の予約を取りたくて。電子カルテが病院のシステムとつながっているの、すぐに検査の空き状況が分かり、予約も取れて助かりました。

PM 12:15

#### みど 庄原市集会所に到着

- 4 看護師も顔なじみなので、さまざまな相談を気軽な感じで話せる。
- 5 りんご農園を営むご夫婦の診察。「旦那さんを初めて診たのは、心不全による2カ月間の入院から帰宅した直後。そのころに比べたらかなり回復しました。いつも、りんごの世話を頑張らずしてしまうのを心配しています……」(竹村医師)。
- 6 高血圧、肝機能障害を抱える患者さんとは、次の検診時期の相談も。



いのうえ のぶひさ  
井上 信宏さん・80代

庄原赤十字病院まで行くと移動にも時間がかかるし、病院でも長い時間待たなくてはいけないので1日かかり。近くに来てくれるのは助かりますよ。月に1度ですが、同じ先生が診てくれるので安心です。



かわべりきお  
川邊 力男さん・90代  
カツ子さん・80代

りんご農園を始めて約50年。畑仕事をしているとけがも絶えず、体力の限界も感じています。小さな苗から育て上げたりんごの木を見捨てられません。巡回診療に来てくれるおかげで、なんとか体のケアをしながら維持していくことができます。



PM 2:30

#### 庄原赤十字病院に帰着

#### 巡回診療こそ、へき地の「希望の灯」。地域の人々の生き方を尊重するために

巡回診療は40年ほど前から行っています。当初は週に1度の診療で20人もの利用者がいたものの、年々利用者が減り、院内でも「もう巡回診療は必要ないのではないか?」という意見が出ることがありました。利用者の声も聞いてみようという思いを傾けたところ「行かなくなったんじゃない。行けなくなったんだ」という意見が。ハッとしました。ある患者さんは「バス停まで4キロ歩いて、1日数本しかないバスに乗り、やっとのことで巡回診療が来る集会所にたどり着く」と、診療までの道のりが果てしなく遠いことを知らせてくれました。高齢になるほど、遠距離の移動が厳しくなる現実があります。打開策を思案しているところに、広島県から、地域医療再生基金を活用するアイデアの募集があり、病院職員から「移動診療車はどうでしょう?

バス型であれば、さまざまな地域に医療を提供することができる上、災害時には日赤の救護活動にも活用できます」と提案が。この意見が実を結び、移動診療車が誕生しました。病院が遠いならば、近い場所に居を移せばいいという考え方もあるかもしれませんが、私たちはそこに住む人たちのこれまでの人生や生き方を尊重していきたい。以前、救急車で運ばれてきた患者さんから「暗闇の中で赤十字のマークが灯っているのが見えてきたときに、救われた気持ちになった」という言葉をいただいたことがありました。まさに私たちの使命は、庄原市で医療の灯をともし続けること。そして、**無医地区の人々にとっては、移動診療車は希望の灯**。これからも、その灯を守り続けていきます。



庄原赤十字病院  
院長  
なかしま こういちろう  
中島 浩一郎さん